

より戻す時も同然也主勝手口をさしおく事も有、又は明ながら挨拶して居ル亭主もあり、其時は秘藏の物たりともかき疊に戻す、勝手口さし置時は、道具により秘藏の物ならば客の内功者成人道具疊に行て、扱道具を別入、かき疊へやつて受取て、臺目所に道具相應にかねよく置て坐に歸る事有、勿論常の物ならば主勝手口をさし置たりともかき疊にかへすべし。

〔客之次第〕一茶入こふ時分は、茶をとり置さまに、亭主ちやわん茶巾茶せんをも仕廻さ、くをふくさにてのごひまふ時分に所望してよし、是は亭主ふくさ物の手にある次而にて侍れば、其ふくさにて茶入をふき出させん手づかひなり。

一茶入出され候時、總客ひぢをつかへ、茶入をのぞき見てほめる、名物の茶入なれば、亭主より手に御取候て御覽候へと申、其時ふところより手拭を取出し、手をのごひぢぢをた、みに付て茶入をとり、まづなりをちと見てふたを取、其ふたの内ばかりを見て、ふたを右のかたに置、茶入の口つき内の體云、くすりどまり、いとまりのやうす不殘見て、よく／＼ほめておしいたゞき、次へ渡す時に、又初の所に置なり、次の人も同前なるべし、但せとやき日本物ならば、客より何と手にとり見申度と云て、扱手拭にて手をのごひ右のごとくに見申なり、客いづれも同前に見て、下座の人又上座の人に渡す、上座の人いよく／＼又見て又いたゞきて、本の所に茶入の表を亭主の方になしおくなり、此見る間には、亭主は勝手へ入、各見仕廻たる時分に、亭主また出て茶入をとり申さる、其時客おの／＼ゐんぎんに禮をする事なり。

〔茶道正傳集 上〕眞爐臺子諸作法

一亭主少間を置、炭斗を持出、薄茶前の炭を直し候、但炭置候作法、前後替る事なし、但薰物をくべおはる時、上客より火箸所望有、則火箸を左へ持替、右の手に而釜敷紙を取出し、火箸の先を拭ひ、火箸を揃て頭のかたを上客の方へなして、炭斗の向疊の目に隨て直に置、炭斗を持て勝手へ入